

# St. Luke's International University Repository

## 障害のある看護学生の演習・実習での体験: DIPEX-Japan「障害学生の語り」データの2次分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀬戸山, 陽子, 森田, 夏実, 射場, 典子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.34414/0002000100">https://doi.org/10.34414/0002000100</a>

# 障害のある看護学生の演習・実習での体験

## —DIPEX-Japan「障害学生の語り」データの2次分析—

瀬戸山陽子<sup>1)</sup>，森田 夏実<sup>2)</sup>，射場 典子<sup>3)</sup>

### 抄 録

**目的：**障害のある看護学生の演習・実習での体験を明らかにし、障害のある看護学生と共に学べる環境づくりへの示唆を得る。

**方法：**本研究は、障害学生の体験を明らかにした1次分析のデータのうち、看護学生のデータを用いた2次分析である。1次分析の公表手段である「障害学生の語り」ウェブページとは、当事者の体験を社会に生かすDIPEX (Database of Individual Patient Experiences) の方法論を用いた「語り」のウェブページであり、2023年4月現在、37人の障害学生体験者の語りを映像・音声等で視聴できる。2次分析の対象は、看護基礎教育課程の時期に障害があった7人のデータとした。全逐語録をコーディングし、コードの類似性から上位カテゴリーを見いだした。倫理的配慮として、協力者に対し1次分析を目的としたインタビュー前に研究目的で2次分析を行うことに関し承諾を得た。東京医科大学医学倫理審査委員会の承認済み（承認番号2018-089）である。

**結果：**協力者は20～40歳代で、女性3人、男性4人、障害は聴覚障害2人、肢体障害1人、内部障害3人、発達障害2人、精神障害1人で、2つ以上の障害を重複している者もいた。語りから、【学校からの合理的配慮や環境調整】【自らの障害のために直面した壁・困りごと】【困りごとに対する思い】【自分なりの対処や工夫】【周囲への説明や相談】【自らの障害を通じた学び】という6つのカテゴリーが見いだされた。

**結論：**障害のある看護学生は、支援が確立していない演習・実習という学びの場において困難に直面し葛藤などの思いを抱きながらも自分なりの工夫を重ね、障害を通じた学びを得ていた。共に学ぶ環境づくりのために、①合理的配慮事例の蓄積、②組織的な体制整備、③共に生きる文化の醸成が求められる。

**キーワード：**障害のある看護学生、語り、演習・実習での体験、質的研究、2次分析

## I. 緒 言

日本は2014年に国連の障害者権利条約に批准し、2016年に障害者差別解消法が施行された。改正法成立により、私立大学でも2024年4月から合理的配慮の提供は義務化される（内閣府、2021）。大学等の障害学生数は2021年に40,744人と15年で8.25倍になり、全学生に占める割合は1.26%である（日本学生支援機構、2022）。看護系単独のデータはないが、保健（医・歯学を除く）領域の障害学生は3,561人で、関係学科別学生数（文部科学省、2022）から計算すると障害学生割合は1.31%で、全学生に占める割合より高い。

アメリカの850以上の看護系大学の連携組織である看

護系大学協議会（American Association of College of Nursing；AACN）では、障害のある看護学生と共に学ぶ教育を目指し情報リンク集を公開してきた（AACN、2022）。近年、障害のある医療系学生の教育機関向けガイド（Meeks et al., 2021a）や、学習障害やナルコレプシー（過眠症）、聾など、多様な障害のある看護学生の事例集（Neal-Boylan et al., 2021）も出版されている。障害のある看護学生と実習指導者対象の調査から、学生は臨床現場で配慮を求めづらく、支援機器が持ち込みにくいこと（Epstein et al., 2020）、精神発達障害の看護学生で対人関係スキルに課題があることが報告されている（Pillion et al., 2021）。その一方で、教員側が学生に適した調整方法を見いだし（Horkey et al., 2019）、当事者が障害特性に合った対処を見つけた報告もある（Crouch, 2019）。

このように近年障害のある看護学生の研究が進むが、演習・実習の場で学ぶ現象は十分に明らかにされていない。また教員対象の研究は多いが、学生の体験や思いを

受付日：2023年5月9日/受理日：2023年9月1日

1) 東京医科大学教育IRセンター

2) 認定NPO法人健康と病いの語りディベックス・ジャパン

3) 聖路加国際大学大学院看護学研究科

明らかにしたものは少ない。共生社会が求められ、医療者集団の多様性が価値あるものと見なされるなか(Singh et al., 2022)、蓄積の浅い演習・実習において障害のある看護学生の体験を当事者の語りから明らかにし、共に学ぶ環境づくりを検討する意義は大きい。

なお、本研究の「障害」の定義について、日本学生支援機構は、障害学生の分類を「視覚障害、聴覚障害、肢体障害、病弱・虚弱、発達障害、精神障害」としている。本研究では「内部障害」と表現している慢性疾患も「障害」に含まれるものとした。

## II. 目 的

障害のある看護学生の演習・実習での体験を明らかにし、障害のある看護学生が共に学べる環境づくりへの示唆を得る。

## III. 方 法

### 1. DIPEx と「障害学生の語り」

DIPEx (Database of Individual Patient Experiences) は、医療社会学の厳密な手続きに基づいて「患者(当事者)の語り」を収集・分析し、専門家や当事者の助言を得て情報の質を担保したデータベースを構築する質的研究の方法論を用いたものである(Ziebland et al., 2006)。この取り組みは、2001年にイギリスで始まり、ウェブサイト上でインタビュー映像の語りを公開しており、市民や患者家族、研究者や教育者、政策立案者等に広く活用されてきた。2023年現在、取り組みは世界14か国に広がっており、イギリスのウェブサイトでは100以上の疾患や健康状態に関して、各30~50人の当事者の語りを視聴できる(DIPEx and The Health Experiences Research Group, 2001)。

日本では2007年に認定NPO法人「健康と病いの語り デイバックス・ジャパン(以下、DIPEx-Japan)」がイギリスの手法を踏襲し、健康と病いの語りを集めたデータベースを構築し、ウェブサイトを作成した。2023年9月の時点で「認知症の語り」ウェブページ等、10種類が公開されている。

「障害学生の語り」は、障害があり高等教育機関で学んだ体験をもつ者の語りを集めたウェブページで、2021年に公開された(健康と病いの語り デイバックス・ジャパン, 2021)。2023年9月現在、49人の語りを映像・音声等で視聴できる。

### 2. 「障害学生の語り」のデータ収集方法

障害学生の体験を明らかにする目的で行われたインタビュー期間は2018年12月~2021年1月で、2019年10月までは対面、以降はコロナ禍のためオンラインで行った。事前に全協力者に対して、語りのウェブ上での公開と研

究使用について説明し、承諾を得た。インタビューは「障害をもちながら高等教育機関で学ぶ体験」について自由に話してもらう非構造化インタビューの後、語られた内容に関連して、たとえば「どのように大学や専攻を選んだか」「自らの障害と専攻がどのように関係したか」など、より具体的に深くたずねる補足的な質問をした。

### 3. 本研究の分析対象者

本研究は、障害学生の体験を明らかにする目的で収集した49人分のデータのうち、看護系の基礎教育課程において障害があった7人のデータを分析した2次分析である。

### 4. 本研究の分析方法

分析は、全逐語録を意味のとれる単位でコード化し、コード同士の内容の類似性からサブカテゴリーを見だし、さらにサブカテゴリー同士の類似性から上位のカテゴリーを見いだした。その後、全カテゴリーを1つの紙に表現する方法論である One Sheet of Paper (OSOP) で、カテゴリー同士の関係性を示した(Ziebland et al., 2006)。コーディングは、MaxQDA2020のソフトを用いた。コードからのカテゴリー作成過程や、カテゴリー名、カテゴリー同士の関係性に関して、研究者間で妥当性を確認した。

### 5. 倫理的配慮

協力者に対し1次分析を目的としたインタビュー前に、研究目的で2次分析を行うことに関し承諾を得た。実施に際しては東京医科大学医学研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号2018-089)。

## IV. 結 果

### 1. 分析対象者の概要

分析対象者は7人で、20~40歳代、男性4人、女性3人だった。障害の種類は、聴覚障害2人、肢体障害1人、内部障害3人、発達障害2人、精神障害1人で、2つ以上の障害の重複もあった(表1)。

### 2. 見いだされたカテゴリー

【学校からの合理的配慮の提供】【自らの障害のために直面した壁・困りごと】【困りごとに対する思い】【自分なりの対処や工夫】【周囲への説明や相談】【自らの障害を通じた学び】という6つであった。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >で示した。またサブカテゴリーが見いだされたコードを「 」で、研究者の補足を( )で示した。

#### 1) 【学校からの合理的配慮の提供】

学校から提供された合理的配慮に関する内容である。含まれるサブカテゴリーのうち、<支援機器の使用>

表1 協力者の概要

ID	年代 <sup>1)</sup>	性別	障害の種類	インタビュー時の状況	時間(分) <sup>2)</sup>
A	20歳代	男性	発達障害(吃音)	学部学生	117
B	20	女性	聴覚障害(難聴)と内部障害(慢性腎不全)	病院勤務の看護師	111
C	30	男性	内部障害(クローン病)	大学院生・病院勤務の看護師	165
D	20	男性	肢体障害(脊髄損傷・車椅子使用)	学部学生	148
E	40	男性	内部障害(慢性腎不全)	病院勤務の看護師	135
F	20	女性	聴覚障害(ろう)	大学院生	120
G	40	女性	精神障害(うつ病) <sup>3)</sup> と発達障害(ADD)	訪問看護の看護師	145

- 1: 年代はインタビュー時の年代である。
- 2: 時間はインタビューの所要時間で、7人の平均時間は134.4分だった。
- 3: 協力者Gの精神障害は卒後に診断されている。

＜補助者の配置＞＜課題の代替＞は演習・実習に共通し、実習に特有なものとしては＜実習場所の変更＞＜実習での担当患者の調整＞があった。＜支援機器の使用＞は、聴覚障害のあるBとFの聴診器であり、＜補助者の配置＞は、車椅子を使用する肢体障害のあるDへの介助者と、聴覚障害のあるFへの手話通訳者があった。＜課題の代替＞は、肢体障害のあるDの課題における模擬患者が、移乗介助の必要ない患者に変更されたことがあった。＜実習場所の変更＞は、ワクチン接種ができない内部障害のあるBの小児看護実習を外来に変更したことであり、＜実習での担当患者の調整＞としては、低音が聞き取りにくい聴覚障害のあるBの担当患者を、はっきり話す女性にするという配慮が話された。

2) 【自らの障害のために直面した壁・困りごと】

学生が演習や実習において直面した、障害に起因する壁や困りごとである。サブカテゴリーは、＜グループワークの発表がスムーズに行えない＞＜体調をくずし出席日数を満たせるか不安になる＞＜音声で伝えたことが伝わっていなかったと確認できない＞であった。

＜グループワークの発表がスムーズに行えない＞では、発達障害(吃音)のあるAが、「看護だからかグループワークがすごく多い学校で、(男性が)少ないので(略)自然と男の子が発表させられるってのがあって、そのところは(吃音のためにスムーズに言葉が出ず時間がかかることや、周囲に奇妙な目を向けられることもあり)すごく困りましたね」と語った。内部障害のあるBは、＜体調をくずし出席日数を満たせるか不安になる＞として、長期の実習中に自身の障害のために体調をくずしたことについて話した。＜音声で伝えたことが伝わってなかったと確認できない＞では、聴覚障害があるFが以下のようにショックだった出来事を話した。

「自分で限界だになってちょっと感じたことは、患者さんとのコミュニケーションでした。(略)リハビリ中患者さんがすごく積極的で、でも(歩くのには)つえが必要だったんですよ……。 (あるとき,) ちょっと歩きたいって言ったんですけどつえがなかったんで、『私、取りに行くからちょっと待っててくださいね』って(音声で)

言ったんですよ。『あ、わかった、わかった』って言ってくれた(と思った)ので、大丈夫だと思って取りに行ったらトントンって通訳にたたかれて振り向いたら、(患者さんが)もう立ち上がろうとしていて、自分の説明や確認が足りなかったのではないかなと思います。もし手話通訳が呼び止めてくれなかったら、私多分気づかずにつえを取りに行き、帰ってきたときには(患者さんが)転倒していたかもしれないなっていうのに、本当にショックでした」

3) 【困りごとに対する思い】

直面した困りごとに関して学生が抱いたさまざまな思いである。サブカテゴリーは、＜勉強不足と誤解された悔しさ＞＜普通の人とは同じにできない辛さ・葛藤＞＜介助者がつくことでの周囲への申し訳なさ＞であった。

＜勉強不足と誤解された悔しさ＞では、発達障害(吃音)のあるAが誤解され悔しい思いを語った。

「吃音は外見ではわからないことなので、僕が(病院実習での)報告ときに話せてないのが、もってるからなのか、質問されたことを理解してないのか、緊張してるのかとか全然見分けがつかないので、僕の頭ん中では答えがあって、それを伝えるだけなんですけども、(略)頭ん中ではわかってるのに、それを勉強不足だと思われたりとか、『もうちょっとしっかり考えてこい』だとか言われたりするときはちょっと悔しいかなっていうには思います」

＜普通の人とは同じにできない辛さ・葛藤＞では、聴覚障害のあるFが、自分の意図が伝わらず患者が転倒しそうになった実習中の出来事に触れて、自分には看護師はできないのではないかという葛藤を語った。また、聴覚障害と内部障害のあるBも次のように語った。

「(実習中に腎盂腎炎で入院になり、実習を休んでしまっ)て) すごくなんか自分も落ち込んでしまっ。 (略) 改めて私は病気だから、耳のことも体力のことも、普通の人とおなじことはできないんだと思って、挑戦するチャンスさえ与えてもらえないんだと思ったんですね」

＜介助者がつくことでの周囲への申し訳なさ＞では、

車椅子で実習へ行った肢体障害のあるDが次のように話した。

「やっぱり僕にだけ(介助者の教員が)ついてくれたので、(略)患者さん1人に対して学生が2人ないし3人とかでついてやるときは、やっぱり(自分がいることで)人数が多くなっちゃうので、(略)僕が申し訳ないなっていうのは感じてました」

#### 4)【自分なりの対処や工夫】

演習や実習中に生じる困りごとに対して学生が行っていた自分なりの対処や工夫である。サブカテゴリーは各障害に応じて、<原稿を書いて準備すること><教員の隣を陣取ること><できる方法をみんなで考えること><体力面でのマネジメント><患者との距離の調整>という5つがあった。

<原稿を書いて準備すること>では、発達障害(吃音)のあるAが次のように語った。

「緊張するとしゃべれなくなるので、(工夫としては)(略)事前に、(看護師に報告へ)行くときにメモに話すことだけ書いてみたりってのが1個だったりとか、しっかりどもると、この子何かしらを伝えたいのではないかって思って話は聞いてくれたりしたこともあったので、そこところは(話したいと思っている意図が伝わるように)工夫しながら話していました」

<教員の隣を陣取ること>では、聴覚障害・内部障害のあるBが次のように話した。

「学内演習では(略)もういち早く動いて、早めに先生の前をとったりとか、そこで聞いたりっていうのがあったので、逆にそういう工夫をすることで、先生からももちろんやる気があるようにもちろん見られますし、しっかり聞くことで学習への意欲はすごく高まった気がしますね」

<できる方法をみんなで考えること>では、透析で使用する手首のシャントに圧をかけられない内部障害のあるEが、体位変換の方法を同級生と考案した体験を語った。

「演習のときにできない手技が、たとえば体位変換ですね。内シャント(透析の際に使用する血管)って、上から重さを載せてはいけなくなっていきますので、(略)学校の先生に、『できなければ、では、できる方法を考えようか』って言われるんですね。手を入れない方法、自分ひとりでは思いつかないんですね。なので、友人たちが『じゃあ、いっしょに考えよう』って言って、(略)みんなが手伝ってくれたんですね。そこは本当にありがたいなっていうふうに、思いながらいました」

<体調面でのマネジメント>に関して、内部障害のある3人が、自分の体力やストレスマネジメントを意識しながら実習を行っていた。

「体調をくずしやすかったので、(課題はぎりぎりになって結局出せないと困るので)締め切りよりも早めに出すっていう習慣をつけてやってきました。(略)免疫抑制剤を飲んでるので、注意しても(感染症に)他の方よりはかかりやすいので、手洗いうがいとかは他の人より

は結構しっかりやりました」(B)

「(ほかの学生は実習中はバイトはやめるなか、自分は)バイトっていう別の日常があることによってストレスが抜けていたっていうのはあったので、国家試験の勉強中もずっとバイトも続けて……。 (略)まったく違う時間を過ごせるっていうのが、逆に自分の体調管理法だったのかなっていうのは思いますね」(C)

他にもEは、実習では「やりすぎない」ことを意識し、看護記録を集中して行い、体調管理のために食事に気をつけたことを語った。

<患者との距離の調整>では、精神障害と発達障害のあるGが、心理面で患者に影響されそうになったときに患者との距離を調整したと語っていた。

「やっぱり精神科の実習のときに自分は、患者さんに引き込まれるような気がして、(略)うつの患者さんを受け持っていたんですけども、(略)あんまり気持ちを深く聴きすぎないというか、(略)実習がとりあえず終わればいいなっていう感じでちょっと、引きながら実習していた感じです」

#### 5)【周囲への説明や相談】

自分の障害関連の内容を、どのように周囲に説明したり相談したりしていたかである。サブカテゴリーは、<教員への相談><実習先への説明><担当患者への説明>であった。

<教員への相談>では、聴覚障害と内部障害のあるBが、実習担当教員と臨床指導者には担任から説明がなされたが、自分でも直接説明したことを語った。また肢体障害のあるDは、実習中の排便コントロールについて次のように教員に説明していた。

「実際に1回か2回だけ(便が)漏れたんです。いちおう、そのずっと担当でついてくれた先生には漏れるかもしれないってことは伝えてあったので、漏れたときに自分で、『すみません、抜けます』って言って実習抜けて片づけとかはしてたんですけど、そういった先生たちのサポートがやっぱりしっかりとあったおかげで、在学中も困ったなっていうのが特になくすごすことができました」

<実習先への説明>では、障害が外見でわからない内部障害のある2人が、実習先に自分の障害を伝えるかどうかについて話していた。

「(実習先への)相談は特にしてなくて、実習に入るときの体調がよかったので、(略)悪くなりそうだったら言おうとは思ってたんですけど、これぐらいだったら言わなくても大丈夫かなって」(C)

「実習先の病院に対して、透析をしているっていうのを伝えるかどうかって、学校の先生には聞かれました。そのときには私は伝えなくていいですっていうふうにお伝えしたんですね。伝えることで、他の友達とかと違うような対応をされるのも嫌だなって思っていました」(E)

＜担当患者への説明＞では、車椅子のDが担当患者に対して、「車椅子だからできないことはあるけど、ついでに専門の先生がいらっしやるので、この2人でやらせていただきます」と伝えたことを語った。

#### 6) 【自らの障害を通じた学び】

学生が自らの障害を通じて学んだ内容である。サブカテゴリーは、＜サポートを得ることで動き方を学ぶこと＞＜自分のできることに目を向けること＞＜マイノリティ性にとらわれすぎない視点を知ること＞があった。

＜サポートを得ることで動き方を学ぶこと＞では、聴覚障害・内部障害のあるBが、一度サポートを得たことで自信を得て動けるようになった体験を話した。

「シャワー浴って普通の方でも聞こえにくいと思うんですけど、特に（自分は）聞こえにくくて、初めての実習っていうのもあって、担当の指導者の方がサポートしてくださったことで、自分がどう動けばいいのかっていうのはすごく学べて」

＜自分のできることに目を向けること＞では、2人の学生が障害のためにできないこともあるが、できることに目を向けた体験を話していた。

「（体調をくずして）私はもう看護師になるかならないか（略）迷ってた時期で、そのなかで精神科の実習を行ったら、ほんとに今までの実習と違って、（略）役に立てることもあるんじゃないかなっていうのを、最後の精神科の実習で思い始めて、精神科ってすごく“いいところを生かす場所”なんですよ、（自分も）耳が悪くてこれはできないけどこっちはできますというふうに、一生懸命やってきた自分に何となく似てる気がして」（B）

「実習中に自分ができないことが多くて、申し訳ない気持ちになったりっていうこともいろいろあったんですけど……、自分だったらなにができるのかなと思って、（患者向けパンフレットをつくり、患者や指導者に褒めてもらった体験を通じて）（略）そこから自分は、看護だけど技術ができないから、話術だったり、コミュニケーションだったり、そういうのを生かしながらの仕事だったらできんじゃないのかなって思ってたんで、いちばんそれが実習中で心に残っています」（D）

＜マイノリティ性にとらわれすぎない視点を知ること＞では、聴覚障害のあるFが、マイノリティである患者とのかかわりについて語った。

「自分は小さいときから手話で育っていて社会のほとんどは日本語の会話だから、マイノリティだなんて感じることはある。文化も違う。（略）（実習で担当した）患者さんもLGBTの方で（略）私は（担当患者さんの）これまでの社会のなかでのマイノリティという立場での抑圧経験が、病気や精神へ影響を与えているという前提でいたら（それに対して、現場の指導者から）あなたの仕事は看護であって過去の生活の支援はできないでしょうって言われました。（略）マイノリティだからではなくて、もっと生活を見据えて支援をしなきゃって言われた

ことを覚えています」

## V. 考 察

障害のある看護学生は、学校から合理的配慮を受けながら学ぶ演習・実習の場において、自らの障害ゆえの壁や困りごとに直面して、悔しさや葛藤、申し訳なさを抱えつつも、自分なりに工夫し対処する体験をしていた。また、自分の障害や困りごとを周囲に説明したり相談したりしながら、障害を通じた学びを得ている者もいた。以下、障害のある看護学生が共に学べる環境づくりに関して3点から考察を行う。

### 1. 演習・実習における合理的配慮事例の蓄積

学生は、＜グループワークの発表がスムーズに行えない＞＜体調をくずし出席日数を満たせるか不安になる＞＜音声で伝えたことが伝わっていなかったと確認できない＞といった障害のためのさまざまな困りごとに直面し、悔しい思いや葛藤を抱いていた。グループワークの発表時間が決まっていることや、実習の単位認定に必要な出席日数が厳格に定められていること、音声でコミュニケーションをとることは健常者に便利な社会の文化・慣習である。これらは善し悪しではなく、社会はマジョリティ仕様につくられており、学生が直面した困難は、社会が障害のある人を想定していないために生じると考えられる（出口，2021）。

障害者権利条約では、障害は本人の機能障害と健常者仕様である社会の環境や慣習、制度とのミスマッチ（社会的障壁）により生じると考え、合理的配慮は社会的障壁の除去を目的とされる（川島ら，2016）。今回【学校からの合理的配慮の提供】において話された配慮内容は、他分野を含めた障害学生に対する配慮事例（日本学生支援機構，2015）や、アメリカの医療系の障害学生への配慮事例（Meeks et al., 2021b）と一致したが、看護の実践的な演習・実習の場における合理的配慮は、いまだ情報が不足する。障害のある看護学生が求めた際に社会の側の調整を円滑に行えるよう、看護教育カリキュラムにおける演習・実習における合理的配慮事例の蓄積が必要と考えられた。

### 2. 障害のある学生が学びやすい組織的な体制整備

障害のある看護学生は、多様な困難に直面しながら、対処や工夫、周囲への説明や相談を行って、障害を通じた学びを得ていた。壁に直面しながらも自らの特性に合った対処法を見いだすことは、先行研究のディスレクシアの学生例を支持した（Crouch, 2019）。障害のある看護学生の割合は他分野と同程度にもかかわらず、医療の専門的な学習内容を学ぶことや、実際の医療現場で実習を行うことから、体制の整備は遅れている。障害のある看護学生の他学生との同等な学習機会を保障するため、

各教育機関には組織的な体制整備が求められる。

文部科学省が示した障害学生のために大学等が備えるべき体制には、施設のバリアフリー化や情報公開等の①事前的改善措置や、対応要領の作成等の②学内規定の整備、障害学生支援を担う委員会等をつくる③組織としての取り組みが含まれる(竹田, 2020)。また医療系の障害学生支援は、医療系の学習環境になじみが薄い一般の障害学生支援員(コーディネーター)と協働しにくい。アメリカでは医療系に特化した障害学生支援員の養成が2022年より開始されたが(Docs with disability Initiative, 2022)、日本でも医療系に特化した支援員の育成が求められる。支援員の存在は、偏見やバイアスを恐れて評価を行う教員に配慮を求められないといった、障害学生支援における利益相反(conflict of interest)を避けるためにも重要である(Meeks et al., 2021c)。

### 3. 多様性の価値と多様な人が存在できる文化の醸成

障害のある看護学生の語りには、「他の人と同じに扱ってほしかった」ので障害を開示しなかったというものがあった。他学生と同等に扱ってほしい思いを抱く学生例は先行研究を指示する(Neal-Boylan et al., 2017)。このように語りからは障害を開示すると障害ゆえの偏見や差別に遭い、他の学生と同等に扱われないのではないかと恐れていることがうかがえる。実際全米医学2年生対象の調査では、障害があると回答した2,438人(9.0%)のうち、必要だが配慮申請をしていない学生が260人(12.1%)おり、理由は差別や偏見への恐れだった(Meeks et al., 2022)。また発達障害(吃音)の学生が、吃音のために言葉が出ないことについて現場の看護師に「勉強してこい」と言われた例もあったが、その学生も自分の障害を伝えていない。日本では法律に現在もなお障害に関する欠格条項が存在しており、医療職は健常者がつく職業というイメージが強い。

しかし、多様性の価値を見逃してはならない。コミュニティ内にマイノリティが共にいることにより、周囲が仲間から学び、相互理解が促される。日本の医療系学生の先行研究でも、聴覚障害学生を担当した看護教員が他文化である聴覚障害を理解する必要性を感じ、同級生は聴覚障害の多様性を知ることができていた(森下ら, 2019)。また四肢麻痺の医学生と同級生は、障害のある学生と共に過ごすことでの困難が、学年が上がるにしたがい減少している(埜田, 1998)。さらに同級生に聴覚障害学生がいたことで、7割の学生の聴覚障害に対する理解が進んだ(埜田ら, 2012)。

障害のある人の医療アクセスに課題があることは多くの研究から示されており、その背景には、医療者の一様性がある。近年の調査で、障害のある人に障害のない人と同じ医療を提供できる自信がある医師は、40.7%にとどまった(Iezzoni et al., 2021)。看護学生の障害のある

人に対するネガティブな態度も、障害のある人が身近でないためとされる(Edwards et al., 2021)。教科書で出会う事例の多くは、それまで健常な者が疾患を得た場合で、日常的に障害と共に生きる人が医療にかかることは、あまり想定されていない。

アメリカでは2022年、医療の質向上を目指し、大学の研究チームと医学部間組織が連携して、障害のある医療系学生・医療者支援の大規模プロジェクトが立ち上がっている。調査が蓄積され、社会啓蒙のため障害のある医療者や支援者70人以上のエピソードがPodcastで配信される(Docs with Disability Initiative, 2022)。また2000年代初頭より米国で障害のある看護職支援を行うNPOでは、臨床で働く義手の看護師や、盲導犬を連れた看護師、ディスレクシアの看護師の体験が共有されてきた(Exceptional Nurse, 2023)。

筆者を含め、医療職者である教員は一様性の高いコミュニティですごしてきたものが多い可能性がある。また障害のある人への対応を学んだことがなく(L'Ecuyer, 2019)、対応に自信をもてない面もある(戸部, 2018)。しかし前述のように当事者がいることで、教員側も次第に支援の方法を見つけている(Horkey, 2019)。当然、一学生は医療の質向上のために存在するわけではない。しかし、結果としてだれもがかかりやすい医療に近づく価値を意識し、まず医療者教育の文化が多数派仕様であることに気づくことが重要である。そして、多様な人が共に学べることができ、障害のある看護学生が葛藤を抱くことなく歓迎される文化を当事者と共にすごしながらつくっていくことが求められる。

本研究の限界として、協力者に40歳代の者もおり学生時代が15年以上前であることから、現在と障害のある人を取り巻く社会情勢や学習環境が変わっている可能性がある。今後の体制をより具体的に検討するには、現役もしくは学生時代が比較的最近の当事者に語りを聞くことが求められる。

## VI. 結 論

障害のある看護学生は、実践に近い演習・実習において、困難を体験し、障害のある自分が他者を援助する看護師になりうるかといった葛藤を抱いていた。しかし自らの工夫や仲間から助けを得ること、さらに自分自身について周囲に説明をして理解を得て障害を通じた学びを経験していた。障害のある看護学生への配慮事例を蓄積しながら、組織的な体制整備を進め、長期的に医療の質向上を目指した多様性推進のための文化の醸成が求められる。

### 謝辞

インタビューにご協力いただきましたみなさまに深く感謝いたします。本研究は、2017年度トヨタ財団研究助成：研究

テーマ名「障害学生のエンパワメントを促す当事者の『語り』の映像アーカイブ』の構築」(研究代表者・瀬戸山陽子)を受けて行われた。利益相反は存在しない。本研究の一部を第27回聖路加看護学会で発表した。

## 引用文献

- American Association of Critical-Care Nurses (2022) : *Accommodating Students with Disabilities*. <https://www.aacnnursing.org/Education-Resources/Tool-Kits/Accommodating-Students-with-Disabilities> (2023/5/2).
- Crouch AT (2019) : Perceptions of the possible impact of dyslexia on nursing and midwifery students and of the coping strategies they develop and/or use to help them cope in clinical practice. *Nurse Education in Practice*, 35 : 90-97.
- 出口真紀子 (2021) : 論点3みえない「特権」を可視化するダイバーシティ教育とは？. 多様性との対話：ダイバーシティ推進が見えなくするもの, 岩瀬功一 (編), 165-174, 青弓社, 東京.
- Docs with Disability Initiative (2022) : *Homepage*. [https://www.docswithdisabilities.org/\(2023/5/2\)](https://www.docswithdisabilities.org/(2023/5/2)).
- Edwards AP, Hekel BE (2021) : Appraisal of disability attitudes and curriculum of nursing students : A literature review. *International Journal of Nursing Education Scholarship*, 18 (1), <https://doi.org/10.1515/ijnes-2021-0029>.
- Epstein I, Stephens L, Severino S, et al.(2020) : "Ask me what I need" : A call for shifting responsibility upwards and creating inclusive learning environments in clinical placement. *Nurse Education Today*, 92 : 104505.
- DIPEX and The Health Experiences Research Group (2001) : *Healthtalk*. [http://www.healthtalk.org/\(2023/5/2\)](http://www.healthtalk.org/(2023/5/2)).
- Exceptional Nurse (2023) : *Homepage*, [https://www.exceptionalnurse.com/\(2023/4/22\)](https://www.exceptionalnurse.com/(2023/4/22)).
- Horkey E (2019) : An Exploration of the Clinical Accommodation Process for Nursing Students with Physical Disabilities Using Grounded Theory. *International Journal of Nursing Education Scholarship*, 16 (1).
- Iezzoni LI, Rao SR, Ressleram J, et al.,(2021) : Physicians' Perceptions of People With Disability And Their Health Care. *Health Aff (Millwood)*. 40 (2) : 297-306.
- 健康と病いの語りディベックス・ジャパン (2021) : 障害学生の語り. [https://www.dipex-j.org/shougai/\(2023/5/2\)](https://www.dipex-j.org/shougai/(2023/5/2)).
- 川島 聡, 飯野由里子, 西倉実季, 他 (2016) : 合理的配慮とは何か. *合理的配慮：対話を開く 対話が拓く*, 19-38, 有斐閣, 東京.
- L'Ecuyer KM (2019) : Perceptions of nurse preceptors of students and new graduates with learning difficulties and their willingness to precept them in clinical practice (Part 2). *Nurse Education in Practice* 34 : 210-217.
- Meeks L, Jain N, Laird E (2021a) : *Equal Access for Students with Disabilities : The Guide for Health Science and Professional Education* (second edition). Springer Publishing, New York.
- Meeks L, Serrantino J, Jain, NR, et al.(2021b) : Accommodations in Didactic, Lab, and Clinical Settings. *Equal Access for Students with Disabilities : The Guide for Health Science and Professional Education*, Meeks LM, Jain NR, Laird E (Eds.), 101-152, Springer Publishing, New York.
- Meeks LM, Case B, Stergiopoulos E, et al.,(2021c) : Structural Barriers to Student Disability Disclosure in US-Allopathic Medical Schools. *Journal of Medical Education and Curricular Development*, 8 : 238212052110186.
- Meeks, LM, Pereira-Lima K, Plegue M, et al.(2022) : Assessment of Accommodation Requests Reported by a National Sample of US MD Students by Category of Disability. *JAMA*, 328 (10) : 982-984.
- 文部科学省 (2022) : 学校基本調査 令和3年度 関係学科別学生数. [https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?stat\\_infid=000032155512](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?stat_infid=000032155512) (2023/5/2).
- 森下智美, 春田佳代, 相撲佐希子, 他 (2019) : 聴覚障害がある看護学生支援の一例：教員へのインタビュー調査から. *修文大学紀要*, 10 : 97-103.
- 内閣府(2021) : 障害を理由とする差別の解消の推進. <https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai.html> (2023/5/2).
- Neal-Boylan L, Meeks LM,(2021). *Disability as Diversity : A Case Studies Companion Guide*. Springer, New York.
- Neal-Boylan L, Miller M (2017) : Treat Me Like Everyone Else : The Experience of Nurses Who Had Disabilities While in School. *Nurse Educator*, 42 (4) : 176-180.
- 日本学生支援機構 (2015) : 障害のある学生への支援・配慮事例. [https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_shogai\\_hairyu\\_jirei/index.html](https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_hairyu_jirei/index.html) (2023/5/2).
- 日本学生支援機構 (2022) : 令和3年度 (2021年度) 障害のある学生の修学支援に関する実態調査. [https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_shogai\\_syugaku/2021.html](https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/2021.html) (2023/5/2).
- Phillion R, St-Pierre I, Bourassa M (2021) : Accommodating and supporting students with disability in the context of nursing clinical placements : A collaborative action research. *Nurse Education in Practice*, 54 : 103127.
- Singh S, Meeks LM (2022) : Disability inclusion in medical education : Towards a quality improvement approach. *Medical Education*. 57 (1) : 17-20.
- 竹田一則 (2020) : 障害のある学生の修学支援に関する検討会報告 (第二次まとめ) の概要と今後. よくわかる！大学における障害学生支援, 竹田一則 (編), 8-9, ジアース東京新社, 東京.
- 戸部郁代 (2018) : 看護教員における発達障害学生に対する意識と修学支援の現状. *発達障害研究*, 40 (2) : 165-174.
- 埴田和史 (1998) : 四肢麻痺のある医学生の修学事例の検討. *医学教育*, 29 (4) : 245-251.
- 埴田和史, 北原照代, 松浦 博 (2012) : 高度聴覚障害学生への医学教育の経験と課題. *医学教育*, 43 (4) : 299-307.
- Ziebland S, McPherson A (2006) : Making sense of qualitative data analysis : an introduction with illustrations from DIPEX (personal experiences of health and illness). *Medical Education*, 40 (5) : 405-414.

# Experiences of Nursing Students with Disabilities in Lab and Clinical Setting Training

## —Secondary Analysis of Data from DIPEX-Japan “Narratives of Students with Disabilities” —

Yoko Setoyama<sup>1)</sup>, Natsumi Morita<sup>2)</sup>, Noriko Iba<sup>3)</sup>

1) Tokyo Medical University Institutional Research Center

2) Certified NPO organization DIPEX-Japan

3) St. Luke's International University, Graduate School of Nursing

**Objective** : To describe the experiences of nursing students with disabilities in lab and clinical setting training, and discuss the environment for learning with them.

**Methods** : This research is a secondary analysis of the data collected for the creation of database of students with disabilities (primary analysis). It is created through DIPEX (Database of Individual Patient Experiences) methodology that utilizes the experiences of patients with disabilities in society. As of April 2023, the website “Narratives of Students with Disabilities” contains the narratives of 37 students with disabilities through video, audio, and text. We analyzed the data of seven individuals who had disabilities during their basic nursing education course. All verbatim transcripts were coded, after which we found high-level categories based on code similarities.

**Results** : The participants were 3 females and 4 males in their 20s to 40s. Two of them had hearing disabilities, one had a physical disability, three had internal disabilities, two had developmental disabilities, and one had a mental disability. Some participants had more than one disability. Six categories were identified : **[reasonable accommodation]**, **[challenges they face because of one's disability]**, **[emotions on challenges]**, **[coping with challenges]**, **[explaining with others]**, and **[learning through one's disability]**.

**Conclusions** : Nursing students with disabilities were resourceful while facing challenges and learning through their disabilities. In order to make environment where students with disabilities learn together with others, it is necessary to (1) accumulate cases of reasonable accommodations, (2) develop organizational systems, and (3) improve cultures where they can live together.

**Key words** : nursing students with disabilities, narrative, experiences in lab and clinical setting training, qualitative research, secondary analysis